

## 論文要旨

学位論文題目

「雑誌『オペラ評論』および『オペラ』にみるオペラの受容過程について」

氏名 中津川 祥子

本研究は、大正期のオペラ雑誌『オペラ評論』及び『オペラ』（以下「2誌」）を対象として、現在では「浅草オペラ」と総称的に呼ばれる大正期のオペラ上演の在りようと、オペラが受容される過程について明らかにすることを目的とする史料研究である。当時の出版物においてオペラという語は歌劇と併用され、歌劇とオペラという2語については使い分けという認識が確認できない一方で、両者が別のものとして捉えられることもあるという混沌とした状況にあった。また、2誌に掲載された歌劇団のプログラムを見ると、オペラという語は音楽を伴う演劇に加え、舞踊や合唱など多様なジャンルの演目に対しても包括的に用いられている。本論文では浅草オペラという語を「大正期に日本の様々な地において、時に蔑まれたり技術面には低い評価がなされたりしながらも人々に見せられた、音楽を伴う演劇に加え多ジャンルの演目により構成される芸能」と定義し用いている。

浅草オペラに関する先行研究には新聞や雑誌から上演データを収集したもの等があり、日本におけるオペラ上演の流れを把握するためには有効である。しかし、活動が判明する歌劇団の少なさから上演の在りようが明らかでなく、また、着眼点が上演する側に集中し、オペラの受容について考察する為に重要な観客の在りようも不明瞭である。この原因として関東大震災などの災害が挙げられるが、2誌のような残された資料をもとに、不明瞭になったままの事柄について追究することはできる。

『オペラ評論』は『オペラ』の前身誌であり、出版期間は判明しているだけで大正8年から大正13年までの6年に亘る。本論文では、浅草オペラの担い手であった人々と、それを見る側にあった人々の動向を2誌からデータ化し、大正期の日本人によるオペラが受容される過程を考察した。誌面に現われる編集者、読者そして俳優という3者の活動から、以下のように読み取ることができる。

編集者については読者通信欄や編集後記から、その氏名が明らかとなる。京都や大阪などに支局を創設し、各地から収集した情報を支局通信として掲載している。支局長には読者を登用し、また、読者とは通信欄で親しげにやり取りしていることも読み取れる。このような読者を誌面作りに参加させる方法や通信欄での友好的な雰囲気が、読者に対して雑誌への、そしてオペラへの関心や親近感を高めさせたと考えられる。

そして読者については、居住地について文芸欄等から沖縄以外の道府県名が確認されており、各地に読者がいたことが明らかである。読者通信欄は徐々にページ数を増しているが、投書内容をもとにすると読者の動向について、雑誌等の出版、俳優の後援会や同好会

というグループの結成、そして実際に会って直接に交流を持つことへの要求および実行という 3 種に分類できた。特に、グループの結成や直接交流に関する活動には俳優への応援が関連しており、巔頂の俳優を巡りネットワークが構築されたことが明らかである。読者とは観客の一部でもあるため、読者の動向とは一部の観客に見られた動向と言い換えられる。投書への着眼から、読者たちが俳優の応援に関連してネットワークを構築し、オペラを受容していたことが確認された。

さらに俳優については、誌内付録のオペラ新聞を軸とし、他資料を補完的に用いてその活動を明らかにした。オペラ新聞は、歌劇団ごとに上演演目に加え配役まで詳細に記録している。ほぼ浅草の金龍館のみで公演を打っていた根岸歌劇団と、各地を回って公演する歌劇団の例として東京少女歌劇団、民衆歌舞劇団、楽劇座、浪華少女歌劇団という計五つの歌劇団に焦点をあてた。

根岸歌劇団については金龍館での公演日程や上演演目が先行研究において既にまとめられている。2 誌は、同団が豊富なレパートリーと人気のある俳優を有し、浅草での公演の中心にあったことを改めて示している。

一方で、東京少女歌劇団など四つの歌劇団は、それぞれに範囲は異なるものの独自のレパートリーを持って様々な地で公演を打っていた。オペラ新聞をもとに公演ごとの出演者を整理すると、長期間に及び連続的な出演をしていた者と、単発的にしか出演していない者という 2 層を成している。各地を移動するという歌劇団自体の活動方法に加え、俳優個人の出演頻度という点でも、担い手の活動に流動性のあることが指摘できる。さらに、俳優が単独で演じるような役は演じる俳優が固定されることに対し、複数人で演じるような役は公演により演じる俳優が変わるという傾向にあることが読み取れ、配役においても流動性があると考えられる。このような、各地を巡り、また出演者に関して流動性がある歌劇団もまた、浅草オペラの担い手にあったのである。

以上から、浅草オペラが多様な公演形態をもち、上演する人々とそれを見る人々との間で流動的に受容される過程が明らかになった。また、浅草オペラに関わった人々については、様々な地で公演を打つ多くの歌劇団と、誌面を通して、または実際の観客として俳優たちを応援しながら、オペラを楽しみにする読者という構図があったことが導ける。